



『野球の国から』

実は、高校などのグラウンドでプロ野球の公式戦が行われたケースは、他にもある。

46年に高岡工業専門学校（富山）で

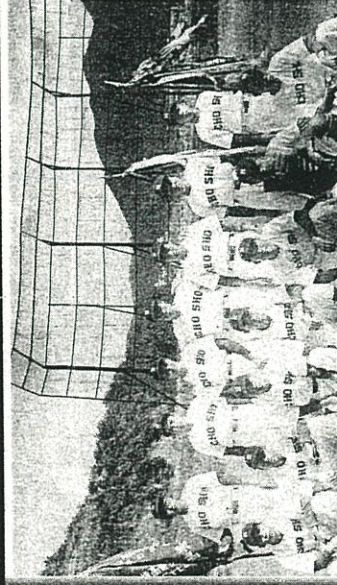
1950年（昭25）6月1日、長崎で初めて行われたプロ野球の公式戦である西日本パイレーツ（51年に西鉄クリッパースと合併し西鉄ライオンズ、現西武）―大洋ホエールズ（現DeNA）戦は、球場ではなく、長崎商グラウンドで開催された。背景には、長崎ゆえの事情があった。

バックネットは潜水艦よけの金網

2試合。48年に福井市立福井高校で1試合。50年に柏崎高校（新潟）で1試合。50、53年に尾道西高校（広島）で3試合。53年に大竹警察学校（広島）で1試合。フランチャイズ制が導入されたのは52年のこと。それ以前のプロ野球は、全国を巡って各地で興行する形態だった。プロ野球を行えるだけの球場がなければ、高校などのグラウンドを使わざるを得なかったのだそう。それぞれの球場に、それぞれのストーリーがあった。

長崎商のケースには、戦災復興を目

長崎にプロ野球がやってきた②



1953年の卒業アルバムに長崎商野球部と当時のグラウンド。前列右から4人目が大阪タイガースに入籍する河津憲一さん、同3人目が西鉄に入る太田正男さん（河津さん提供）

指す人々の思いが詰まっていた。事情は「長崎県スポーツ史」（長崎県体育協会編集、88年）に詳しい。

始まりは、高校野球だった。48年春に、長崎で第2回九州大会が開かれることが決まった。原爆で焦土と化した町の復興は遅々として進まない。食料難に水不足。若者が希望を持てる時代ではなかった。高野連は「野球で若者に希望を持たせ、立ち直らせよう」という県民の願いを受け、大会を誘致した。

ところが、大会を開けるだけの球場がなかった。そこで、市内の高校のうち、最も広い敷地を持つ長崎商が選ばれた。

三菱から鉄筋と戦時中に使われてい

た敵の潜水艦よけの金網をもらい受け、急造のバックネットにした。外野のフェンスは建設会社からもらったパネル。スタンドは地元の祭り「長崎くんち」の棧敷を使った。県や市から補助金が出たが、まだ足りない。各校も拠出した。生徒も整備を手伝った。こうして、面積285坪（約87坪）、中堅340坪（約104坪）の「長崎商グラウンド」は完成した。

無事に九州大会が開かれ、長崎の町にも本格的に球音が戻った。2年後、プロ野球も開催。長崎の人たちにとって、希望のフィールドとなった。

【古川真弥】
(つづく)



『野球の国から』

そのことを知ったとき、私は単純に驚いた。球場ではなく、高校でプロ野球の試合が行われたとは。それもオープン戦ではなく、公式戦。今では考えられない。興味が湧いた。

終戦から5年。1950年6月1日、長崎商―西日本パイレーツ（51年に西鉄クリッパースと合併し西鉄ライオンズ、現西武）と大洋ホエールズ（現DeNA）との5回戦が行われた。主催の長崎日日新聞の紙面を開くと試合経過だけでなく、スタンドの様態まで細かく描かれていた。記事を元に再現したい。72年前へタイムスリップしよう。

前日降り続いた雨もやみ、からりと晴れた絶好の野球日和。新たに始まっ

終戦から5年…校庭の試合に1万人

たセントラルとパシフィックの両リーグ。その新生球団、西日本と大洋の1戦を見ようと午後5時のプレッシャーボールよりもずっと早く、市内油木谷の長崎商グラウンドに午前10時ごろから列ができた。入場料は内野指定席250円、外野130円。安くはない（※当時の平均賃金は月8000円）が、1万人の人だかりだ。

3時過ぎ、大洋が入場。フリー打撃で「魔術の魔術師」平山菊二が打席に立つと、甲子園でもおなじみのうぐいす嬢、堀内ケイ子（平山主将のそとに強い名選手です）と紹介した。平山は「よせよせ」と小石を投げて取っさしがる。だが、軽くバットを振ると、340坪（約104坪）の中堅つ

長崎にプロ野球がやってきた①



西日本と大洋戦を伝える長崎日日新聞の紙面（50年6月2日付、国立国会図書館提供）

を終えた南村不可止にも「頼みます、頼みます」とサインを求める。南村は「試合がすんでからね」とつれない。残念そうなる子どもたちの顔。

いよいよ、試合開始。その前に大洋の選手たちが指定席へサインボールを投げ込んだ。大人も、子どもも争って、勢い余りグラウンドまでなだれ込む。

女性客の姿もあった。学生帽をかぶり、笑顔の青年もいる。近隣の屋根に上ってタタ見を決め込む者や、外野の後ろにある小高い森に陣取るアベックもいた。快音が飛び出すたびに、外野席が大きく波打つ。フェンス際まで伸びる打球に「こんなによく打てたもんだ」と、初めて見るプロの打撃に感嘆しきり。

長崎県での初めてのプロ野球公式戦。選手への憧れや称賛のまなざしは

今と向ら変わらない。平和な風景そのものだった。原爆で廃墟と化した長崎は復興の歩みを始めていた。前年に長崎駅の駅舎が再建。が、終戦は、ほんの5年前。笑顔でボールの行方を追った1万人の中には、筆舌に尽くしがたい体験をした人たちが、たくさんいたはずだ。

45年8月9日午前11時2分。原爆の爆心地から、わずか1.5キロの長崎商も多くの犠牲者を出した。同校「原爆資料」によれば、教職員13人、生徒162人の計175人が死亡。学校は軍需工場となっており、生徒も動員。工場の横で防空壕（ごう）を掘っていて、犠牲になった者も多い。

戦争と平和。両極端なコントラストが、校庭でプロ野球を生んだ。

【古川真弥】
(つづく)

火～土曜掲載

「野球の国から」

西日本の7番左翼は、後の西鉄黄金時代の5番打者で、近鉄監督も務めた関口清治だった。3-0の4回、中越えへ10号ソロを放った。この1発を皮切りに、両チームあわせた本塁打が乱れ飛ぶ打撃戦に、中盤、大洋が追い上げるが、終盤に西日本の打線が爆発。15-4で勝利した。

地元少年4人で結成バットボーイ

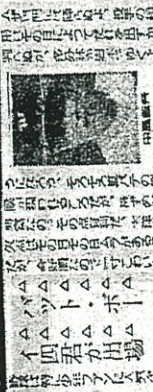
1950年(昭和25)6月1日、長崎で初めて行われたプロ野球の公式戦である西日本パイレーツ(51年に西鉄クリッパースと合併し西鉄タイガース、現西武)ー大洋ホエールズ(現DeNA)戦は、球場ではなく、長崎商グラウンドで開催された。実際に試合を見た人の声を聞きたい。

乱打戦に、さぞ長崎の人たちは盛り上がっただろう。観戦した人の生声を聞けないだろうか。当時、長崎商1年だった元大阪タイガース内野手の河津憲一(88)は「グラウンドには行かなかった。うすうす、覚えている」が、試合内容までは記憶にないという。

雑誌にフアンの声が残っていた。「ホームラン50年9月号に、長崎市から来た本田一郎という人の投稿が載っていた。「(西日本)塚本の二塁への猛烈なるバッドスライディング、(西日本)永利の一撃を見事タイピング・キャッチした(大洋)長持の大喝采を浴びたフアンブレーはさすがかつて東西対抗に出場した選手だけあって見事だった」

長崎にプロ野球がやってきた4

球



「フットフアンを(大洋)平山が撮影で好捕したが、もちろ(じ)も飛んでいたら得意の振舞での魔術が見物出来たと思うと残念だった」



「フットフアンを(大洋)平山が撮影で好捕したが、もちろ(じ)も飛んでいたら得意の振舞での魔術が見物出来たと思うと残念だった」

西日本パイレーツー大洋ホエールズ戦のバットボーイについて報じる1950年6月1日の長崎毎日新聞。右端の少年が松平和夫さん(国立国会図書館提供)

打撃だけでなく、走塁や守備でもプロの技が披露された。目の肥えたフアンも満足させる試合だった。あらためて、当時の長崎毎日新聞を開くと、1枚の写真に目がとまった。試合当日6月1日の朝刊。二ノホーム祭でバットを手に持つ3人の男の手たち。「バット・ボーイ四君が出演」という小見出しに続き、こうあった。

「野球は特に少年フアンに人気を呼んでいるが、当日のマスコットとしてつぎの四君がバットボーイとして出場する(写真は左より谷村、田島、松平の三君)。伊●林小五年谷村増雄、上長崎小五年田島忠男、佐古小四年松平和夫、錢座小一

年森●征」
古い紙面のため、判別が難しい文字もある。田島忠男は「照男」かも知れない。いずれにせよ、地元の少年たちがバットボーイを務めたのだろう。生きていれば、80歳前後。彼らを見つけれないだろうか。名前を元に調べると、幸い1人に行き当たった。

松平和夫。長崎新聞社の社長を務めた人物だ。ちなみに、長崎毎日新聞は後の長崎新聞。同一人物であれば、なんという奇遇だろう。鳥肌が立った。ぜひ、話を聞きたい。

(敬称略、つづく)

火～土曜掲載

「野球の国から」

実際にプレーした人の声を聞きたい。50年当時、同校1年の内野手だった河津憲一(88)に聞いた。今は

急造球場のフェンスは板石ころいっぱい

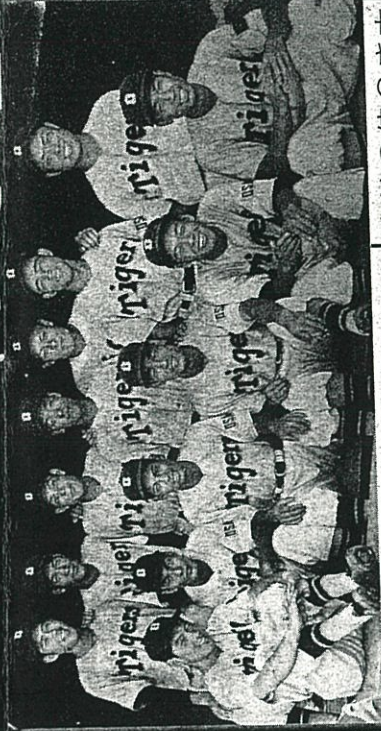
1950年(昭和25)6月1日、長崎で初めて行われたプロ野球の公式戦である西日本パイレーツ(51年に西鉄クリッパースと合併し西鉄タイガース、現西武)ー大洋ホエールズ(現DeNA)戦は、球場ではなく、長崎商グラウンドで開催された。戦災復興を目指す人々の思いが詰まったグラウンドだった。



甲子園の近く、球場の歓声が聞こえる距離に住んでいる。「普通の校庭。そこに(試合の時だけ)ラインを引いてね。専用とは違います。フェンスは1段80ぐらいの良い板を外野に一つと組

み合わせて。低いですよ。お粗末なバックネットはありましたけどね。後は何もありません。石ころがいっぱいありました。小石を拾ってました」
かつてのホームグラウンドを思い出してくれた。急造の手作り。美盛には、プロがプレーするような環境ではなかったのだろう。それでも「僕の時はおちの学校ぐらいいし、しっかりしたグラウンドはなかったですね」。貴重な場所だった。九州大会が開かれた意味は大きかった。九州各県の

長崎にプロ野球がやってきた3



大阪タイガース時代の河津憲一さん(後列左端)。後列右から2人目は後に阪神コーチの三宅伸和、同3人目は300勝投手の小山正明、前列右から2人目は後の阪神コーチ、スガウツの山本哲也(河津さん提供)

有力校が遠征に訪れるようになった。グラウンドができたことが、長崎商のみなから、県全体のレベルアップにつながった。「練習は厳しかつたね。夜まで」。長崎商は52年、春夏甲子園に出場。春は8強、夏は4強まで進んだ。54年夏も甲子園に出場。一時代を築いた。

河津は卒業後、大阪タイガース(現阪神)入り。63年の引退まで通算421試

合に出場した。同期の投手、大田正男は西鉄(現西武)入り。59年の引退まで通算16勝を挙げた。
長崎商は86年に移転した。跡地には今、県立総合体育館が立っている。今年7月23日、私はつししエオールスターゲームの取材で長崎を訪れた。会場となった長崎ビッグNスタジアム(長崎県営野球場)から歩いて10分ほど。試合前、長崎商の跡地まで足を延ばした。往時をつながわせるものは、敷地の入り口脇にある記念碑だけだった。言われなければ、ここでプロ野球の試合が行われたことはおろか、高校だったことも知

りようがない。
体育館では中学生のバレーボール大会が開かれていた。試合を終えた生徒たちが、疲れ切った顔で出てきた。負けてしまったのだろう。ボールにかける思いは、今も昔も変わらない。未来のスター選手たちを見よう。スタジアムへと急ぐ野球少年たちとすれ違った。ソワソワ、ワクワクの顔、顔、顔。憧れのまなざしもまた、今も昔も変わらない。
爆心地から1キロ。77年前、灰じんに帰った場所で、そんなことを思った。
【古川真弥】
(敬称略、つづく)

火～土曜掲載

『野球の国から』

バットボーイは後に新聞社社長

1950年(昭和25)6月1日、長崎で初めて行われたプロ野球の公式戦である西日本パイレーツ(51年に西鉄クリッパースと合併し西鉄ライオンズ、現西武)―大洋ホエールズ(現D.E.N.A)戦は、球場ではなく、長崎商グラウンドで開催された。バットボーイを務めた少年は、後の長崎新聞社社長、故松平和夫ではないか。次男の剛弥(50)に話を聞いた。会ったこともない私からの突然の話にも、熱心に耳を傾けてくれた。昭和25年当時、佐古小4年1。剛弥は私の説明を繰り返すと、こう続けた。

「父で間違いないです」

父は昨年9月に亡くなりました。81歳でした。バットボーイの話は聞いたことがなかったです。そんなことがあったんですね。父が生きていたら、きっと大喜びしたと思います。

想像つかないですけど、いろんな資料にあたって当時の話をしたでしょうね。父自身、記者として歩んできましたから。同じ記者の方が調べて、やってきてくれた。そういう話をされたなら、すごく感動したのではないのでしょうか。野球ではなく、ずっと陸上をしてたんですよ。長崎市出身なんですけど、高校は陸上の強い熊本の済々黉に行きました。短距離、1000mです。中央大学に進み、東京オリンピックを目指したけど、かなわなかった。ならば、取材する側になりたいと、長崎に戻って長崎新聞社に入ったそうです。東京オリンピックの年(64年)です。

報道知でした。忙しくて、仕事で姿を見ないことも多かったです。でも、私も陸上をやってたんですが、大会は見に来てくれてました。厳しいけど、優しくして。兄と弟と3人、そんな父の背中を見て育

長崎にプロ野球がやってきた5

ちました。正しく生きなさい、努力なさいと。父は、ずっとスポーツが好きでした。私が小学生の頃は、居合道をしてました。長崎出身の選手を応援してました。プロ野球はヤクルトを応援していたのを覚えてます。

ヤクルト初代オーナーの松園尚巳は長崎出身。71年9月、長崎では18年ぶりのプロ野球公式戦となるヤクルト対広島戦が長崎市営球場で行われた。77年からは、ヤクルトの持ちゲームによる「長崎シリーズ」がスタート。松園は78年には長崎新聞社の社長に就任する。以来、90年まで毎年、長崎ではヤクルト戦が開催された。

剛弥との電話を終えると、何とも言えない感慨を覚えた。

正直に言えば、最初に思ったのは「間に合わなかった」。せめて、あと1年早く取材ができていれば、残念でならない。和夫本人に、ぜひバットボーイの思い出

明日から「田村藤夫 ドラフトのオズメ」

を聞きたかった。ただ、こんな想像もした。少年に、プロ野球選手たちの姿は、どう映っただろう。センター後方まで、ずっと飛んでいった。関口のホームランは、どう映っただろう。歓声につられるように、見上げたに違いない。空には日球が見えた。5年前まで



58年、記念撮影する西鉄の選手たち。左から大下、豊田、中西、関口

は、B29が飛んでいた空に。その日の経験がスポーツに興味を持つきっかけになったかは分からない。だが、少年は後にオリンピックを志し、記者として、最後は社長として、故郷の発展に貢献した。

今年も8月9日を迎えた。元大阪タイガース内野手の河津憲一(88)は上海で生まれ、終戦から半年ほどして、親の故郷である長崎へ引き揚げた。建物の鉄骨が、曲がったまま放置されていたのを覚えている。「だいぶ年数がたったからね。今の選手は、原爆が落ちたことも知らないでしょうね」。昨夏は母校・長崎商の甲子園出場を喜び、この夏もテレビで甲子園観戦の日々を送った。「平和はいいですよ」とつぶやくように言った。

決して忘れてはならぬ悲劇から77年。復興のプロ野球試合から72年。いつまでも、平和に野球を楽しめますように。

【古川真弥】
(敬称略、おわり)